

平成27年9月9日(水)

UIターンによる都市部から農山漁村への移住・定住の現状

土居洋平(跡見学園女子大学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科)

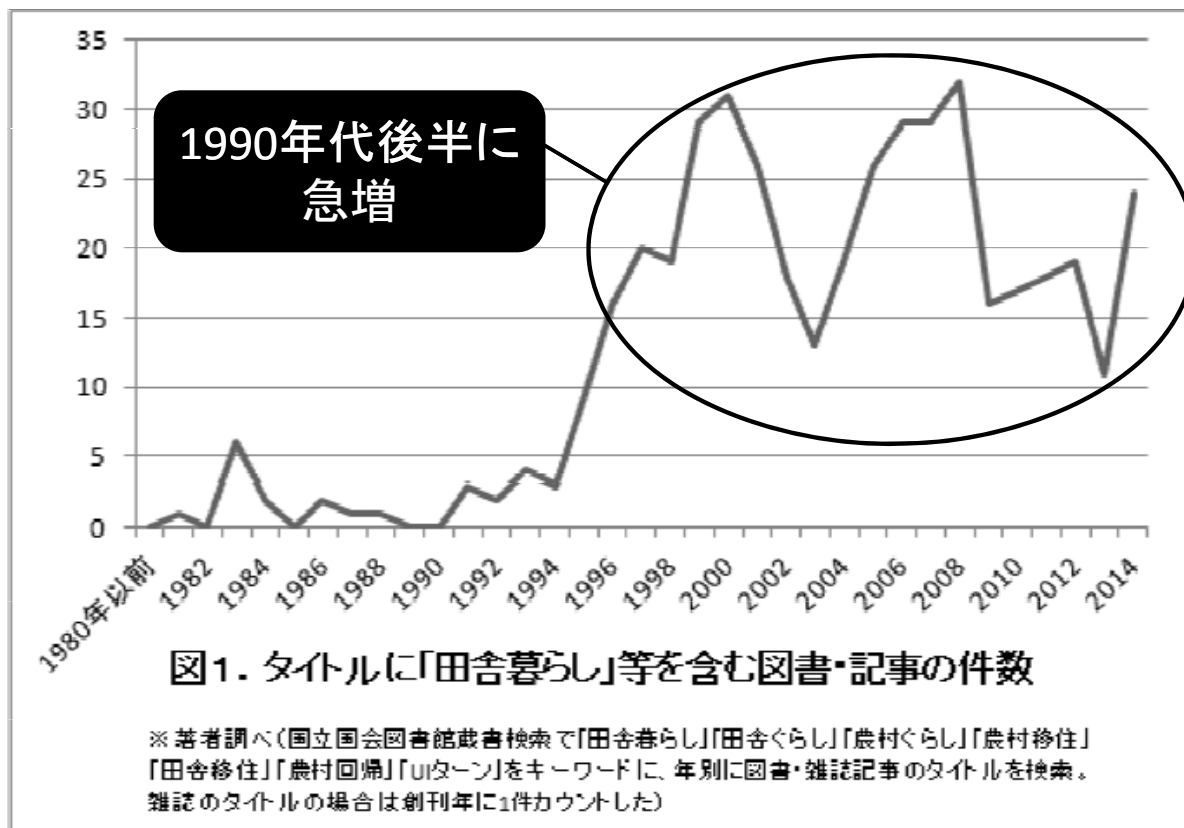
地域活動の展開と農村移住受入れ・定着

ー山形県西川町大井沢を事例にー

報告の構成

1. 農村移住への注目
2. 農村移住の変化
3. 農村移住の現代的課題
4. 山形県西川町大井沢の事例から
 - 大井沢の概要
 - 大井沢への移住の特徴と地域活動の特徴
 - 地域活動と移住の関係
 - 大井沢地域活動の変遷
 - 移住者の大井沢への定着
5. 終わりに一事例が示唆すること

1. 農村移住への注目(1)



1. 農村移住への注目(2)

- 農村移住への注目の高まり: 約20年前～
- 背景: 「農村」に対する意味づけの変化(立川、2006)
 - ～1990年代: 農村 → 農業生産を軸に理解されるもの
 - 1990年代～: 農村 → 農村空間そのものがポジティブな要素があると理解されるように(消費の対象としての農村)
 - 例) 「自然に溢れた」「癒される」場所
 - 「人と人のつながりのある暖かい」場所
 - 「自らの手でモノを作れる」場所
 - それを体験して楽しむ／学ぶ取組みも盛んに
- 要因(概要)
 - (1) 基本的なインフラが整う(水道・道路・除雪・冷暖房・・・)
 - (2) 都市部出身の都市在住者の増加(非日常として農村を体験可能)
 - (3) 政策の変化ー農業振興から農業体験等の導入による振興へ
 - (4) メディアの中で描かれる農村の変化(マイナスイメージから、プラスのイメージへの転換)

(土居、2006)

2. 農村移住の変化(1)

- 1970年代頃から始まっていた農村移住
 - 様々な社会運動を背景に、農村に集団で移住する事例が散見（有機農業の実践・理想的な自給自足のコミュニティの構築・・・）
 - 「農業」の実践／「農業集落」への移住という意味づけ
 - 当初：住民と対立することも→90年代半ばには関係が安定化
- 1990年代後半の農村移住
 - 70年代の移住者組織を介した農村移住の存在（都市とのつながりがあり／地元ともつながりが安定し）
 - 各種の仲介組織を介した農村移住の存在（自然体験の実施／伝統工芸の技術継承をしている組織・・・）
- 2000年代初期の農村移住論
 - 2000年代の移住に関する議論が注目したのは、仲介組織の有無
 - 仲介組織：都市とのつながりを持ち、移住受入れの窓口となる
移住後の就業先となる／そこで研修を受けられる
研修の場合：一定の期間を経て、組織の支援のもと、
移住者は自ら生計を立てられるようになる
（農村生活総合研究センター、2001）

2. 農村移住の変化(2)

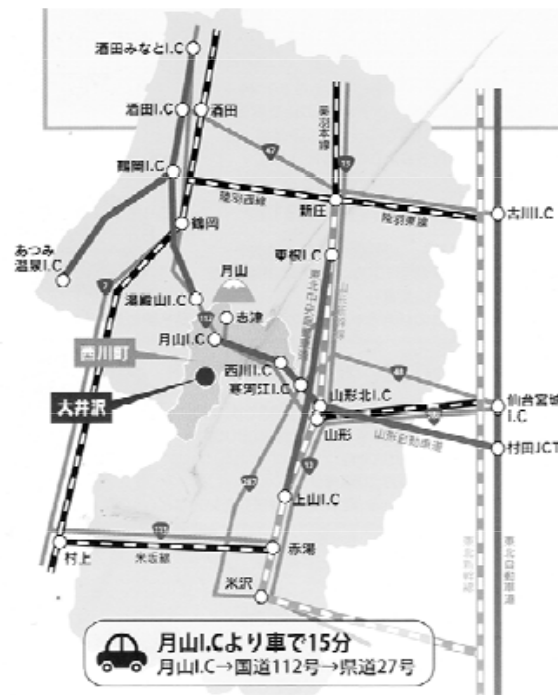
- 2010年代の農村移住への注目
 - 「移住」そのものがテーマになったコンテンツの登場
例:ドラマ『遅咲きのヒマワリ〜ボクの人生、リニューアル〜』(2012年)
映画『WOOD JOB!〜神去なあなあ日常』(2014年)
バラエティ『イチから住〜前略、移住しましたた』(2015年～)
 - 移住事例の増加→書籍やSNS・ネット等で容易にアクセス可能に
- 2010年代の農村移住支援
 - 道府県・市町村での移住支援窓口・移住支援組織の充実
 - 都市部での常設の移住相談窓口の定着
 - 移住支援事業の拡大(田舎で働き隊、地域おこし協力隊等)
 - 国による『地方移住ガイドブック いなか暮らしはじめませんか』公表
- 2010年代の農村移住
 - 農村移住は、希望すれば現実的な選択肢として考慮できるようになる
(移住への関心の高まり・情報へのアクセス可能性の向上・支援の増加)
 - 公的支援を受けた農村移住者も増える
 - しかし、近年になって見えてきた課題も

3. 農村移住の現代的課題

- 仲介組織と現在の移住支援の違い
 - 仲介組織：移住受入れ窓口／地域への橋渡し／就業・研修／定住支援
→ 移住定住には、こうした入り口から定着までの継続的な支援が必要
 - 2010年代の変化と移住支援
 - 移住相談窓口の充実・移住支援政策の充実（地域おこし協力隊等）
 - 仲介組織が果たした「地域への橋渡し」「就業」「定住支援」の機能は、必ずしも準備されているわけではない
- 移住の関心の高まりと移住者受入れを希望する地域の増加
 - 農村移住市場の成立し、地域間競争が起きる
 - 移住者に人気の地域とそうでない地域の差が大きい
- 移住への関心が高まって20年／時の経過により出現する問題も
- 農村移住の現代的課題
 - 「地域への橋渡し」「就業」「定住支援」等の支援の拡大をどのように
実現するか
 - 移住者が来やすい地域の持つ特徴とは何か
 - 移住・定住の先にどのような事態が想定されるか

4. 山形県西川町大井沢の事例から

- 大井沢の概要
 - － 山形県中部、西川町(5,884人／H27)にある山間集落
 - － 人口:246名(高齢化率54%)
 - ・ うち35名が移住者(1ターン)
 - ・ ※ S31の人口は1,566人
 - － 世帯数:101世帯
 - ・ うち16世帯が移住世帯(1ターン)
 - － 地区の85%が山林
 - － 県内屈指の豪雪地帯(約3m)
 - － 居住地の標高:498m
 - － 昭和30年代、冬は陸の孤島に
 - － キノコ・山菜等が特産品
- (移住者が多いことを除くと)
典型的な 過疎高齢化の山村集落



月山朝日観光協会発行パンフレット
「おもいっきり森呼吸 大井沢」より抜粋

大井沢への移住の特徴

- 大井沢への移住の概況
 - 16世帯35名の移住者(1ターン)
 - 現在在住の移住者は、殆ど1990年代半ば以降に移住(町内への移住は1985年というケースも一家族あり)
 - 移住者の職業:紙漉き職人・ソーセージ職人・陶芸家・農家・自然体験インストラクター・学芸員・蕎麦屋経営・民宿経営・年金生活者……
 - 移住の理由:「豊かな自然」「山村らしい暮らし」「貴重なブナ林」等の自然環境・生活文化に関することが挙げることが多いが、多様
- 大井沢への移住の特徴
 - 特定の仲介組織を経て、移住者の多くが来るという形ではない
 - 事例1)T氏:「いずれ地方で暮らしたい」→脱サラ後、町内別集落の ロッジホテルで住込み→大井沢内に古民家を見つけて移住
 - 事例2)M氏:サラリーマン時代に和紙に関心を持つ→埼玉県内で修行→大井沢自然と匠の伝承館が和紙職人として招聘→集落内に移住
 - 事例3)K氏:サラリーマン時代に登山に関心を持つ→自然の中で暮らしたいと、福島で農業研修・就業→ブナの近くで暮らしたいと大井沢に移住
 - 事例4)S氏:学生時代にゼミ活動で田舎暮らしに関心→卒業後、大井沢のフィールドワークに参加→大井沢のオープンな雰囲気にはひかれ移住
 - 「移住者といえばこのルート」というものはない／移住理由も「ここでなければ」という強い要因はあまり聞かない
 - それでも移住し定着する人が多いのは何故か？

大井沢の特徴は地域活動

- 大井沢の地域組織
 - 大井沢の組織: 小字単位の8町内会・自治会と「大井沢区」という組織があり、大井沢区には区長・副区長・区委員・区事務局などの役職がある
(もちろん、他に消防団・婦人会・直売会・水利組合等もある)
 - 「大井沢の未来を描く会」: 大井沢区の委託を受けて、大きな地域行事の企画・提案・運営を行う
- 「大井沢未来を描く会」の活動
 - 参加呼びかけ: 地区全世帯(大きな企画の検討開始時には全戸案内)
 - 参加者: 20代～60代の地区住民、地区出身の近隣在住者、移住者等
 - 活動
 - 「大井沢地域づくりフォーラム」の開催(例年3月、今年は5月実施)
→ 準備の会合は、11月上旬から2～3週に一度のペースで実施
 - 「大井沢秋祭り」の企画・運営(例年10月下旬に実施)
→ 準備の会合は、8月下旬から2週に一度のペースで実施
 - 「大井沢ふるさと保全活動」(草むしり)の企画運営(例年7月中旬に実施)
 - ほぼ通年で、移住者も含めた住民が集まり地域のことを考える機会がある
 - 殆どの移住者が、この会に参加／地区の若者の多くも参加

移住者受入れと地域活動

- 「大井沢未来を描く会」の移住・定着促進効果
 - － 開放的な組織運営
有志参加の形態・20代-60代の幅広い住民参加・移住希望段階で参加可能
 - － 参加による移住者への効果
地域のネットワークに自然と参加・早期にサポートを得ることが可能
(知られていないことによる障壁を低減)
 - － →「大井沢未来を描く会」が「地域への橋渡し」機能を担っている
 - － 移住地選択に対する効果
移住検討段階から「大井沢未来を描く会」に参加する
移住検討段階から「描く会」運営のイベントに参加する
 - ・事前に、地域住民の多くと接する機会を得られる
 - ・どのような地域で、どのような人がいるかがわかる
 - ・移住者に対し、開放的な部分があることがわかる→ 移住地選択に肯定的影響を与える
(補足) 報告者も、移住者でもないが「描く会」に継続して参加。他地域と異なり、通年で参加するようになる。

大井沢の地域活動の変遷

- きっかけとしてのダム建設
 - 集落の上流に寒河江ダムが建設(1990)
 - 「ダムの上流の集落は消滅する」?
 - 危機感を背景に、地域活動が活発に
 - 「大井沢地域づくり計画」の策定
 - 「大井沢雪まつり」の開催(～2010)
 - 多様な世代・立場の住民の参加
 - 「第二次大井沢地域づくり計画」(1998)
 - 様々な世代・立場の住民に呼び掛け検討
計画策定後「大井沢の元気を創る会」に
 - 「大井沢雪まつり」助っ人隊(1998～)
 - 民泊の学生ボランティアが多数参加
 - 外来者の力が必要という認識の浸透
 - 移住者を必要と考える地域へ
 - 2009年調査:84.9%が「必要」と回答
- 大井沢は、移住者を受入れ易い地域に

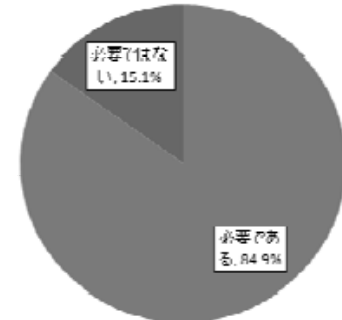


図2. 大井沢維持に移住者は必要か？

※ 移住者は移住して黒計

n=53

移住者の大井沢への定着

- 大井沢への移住者の定着
 - 1年未満で去る人も、10年近くいて去る人もいたものの、3／4程は定着（平成25年度調査の地域おこし協力隊・同一市町村定着率は48%）
- 定着の要因として考えられるもの
 - 移住者自身が、早期から生計手段を探している
それに対して、早期に地域のサポートを受けやすい
 - ※ 比較：地域おこし協力隊、田舎で働き隊の場合
（田舎で働き隊の名称を残したほうが定着には良かったのでは？）
 - 小さなコミュニティへの参加が、「故郷」の形成となる
「景観」等の要因は、移住して日常化すると魅力としては弱くなる？
（事例：大井沢に移住したY氏の場合）
地域コミュニティに溶込み、移住地が「故郷」化すると、
それは代替不能なものとなるのでは？

5. 終わりに―事例が示唆すること―

- 農村移住の現代的課題
 - － 農村移住市場において
 - 受入れ側：地域間競争のなかで、移住地として選択されること
 - 移住側：「移住」の先にある、「地域コミュニティへの浸透」
「（補助金等の支援後の）生計の確保」
 - 共通の課題：移住者が定着すること／してもらうこと
- 大井沢の移住事例が示唆すること
 - － 移住者が移住地として選択し、定着しやすい地域の特徴
 - 地域に「移住者が必要である」という意識が共有されている
 - 多様な世代・立場の住民が関わる地域活動が継続的に行われている
 - 地域活動が開放的であり、移住者が移住前後から参加できる
 - 移住地選択・地域への浸透・生計の確保・定着に肯定的に影響
 - － 上記を踏まえた「移住」の先を見据えた支援が重要
 - 例）地域に移住者ニーズはあるか／どう気づいてもらうか
 - 移住者も含めた住民の多くが参加できる地域運営システムの構築
 - 継続的な生計の確保に対するサポート

参考文献

- ・立川雅司、2006、「ポスト生産主義への移行と農村に対する「まなざし」の変容」日本村落研究学会編『【年報】村落社会研究 41 消費される農村—ポスト生産主義下の「新たな農村問題」』農山漁村文化協会、pp.7-40
- ・土居洋平、2006、「農業の持つ癒しの効果とは？」『農林統計調査』56-2、pp.4-9
- ・農村生活総合研究センター、2001、『若者が集う地域づくり:「男女共同参画社会を目指す中山間地域魅力創造事業」報告書』、農村生活総合研究センター
- ・農村生活総合研究センター、2001、『Iターン女性とともに創る魅力的な田舎暮らし:中山間若者定住対策シンポジウム報告書』、農村生活総合研究センター
- ・土居洋平、2010、「A.大井沢地区の報告 生活基本調査」研究代表 両角和夫『大井沢エコミューゼの実現に向けて—中間とりまとめ—』pp.9-17